

近代的時間を内在的に批判する

——『時間の比較社会学』の展開にむけて——

慶應義塾大学 鳥越信吾

1 背景

「近代の自己認識の学」として成立した社会学は、量的で不可逆的な「近代的時間」を唯一の時間としてながら不問の前提に置いてきた（浜 2010）。だが、近年の社会学の営みを一瞥してみれば、そうした前提は徹底的に対象化され、むしろたとえば時間を多元性や可逆性、あるいは質的な性質において捉えるなど、時間についての考察がさまざまに展開されている（Harvey 1990=1999; Urry 2000=2006）。

本報告は、社会学におけるこうした時間把握の転換点が、いわば「近代的時間そのものの主題化」を果たした A.ギデンズの『近代とはいかなる時代か？』（Giddens 1990=1993）と、真木悠介の『時間の比較社会学』（真木 [1981] 2003）という二つの仕事の成立に具体化されていると考える。というのは、ともに大きくは近代化論という文脈のなかで、近代と前近代（あるいは非近代）との比較という方法でもって、近代的時間が成立していく過程の〈説明〉を目指したことに共通点をもつこれら二つの研究の成立は、社会学が自身の拠って立ってきた近代的時間という前提を対自化し、その探究へと向かっていったことを示唆するものだからである。そのうえで、まさしく「時間の問題を社会科学の主題にすること」（真木 [1981] 2003: 321）が一定程度達成され、時間が社会学における明確な研究主題の一つとなってきた今、その動向の端緒とも言えるこれら二つの研究の位置づけは改めて問われてよい。本報告はこうした背景のもとになされる。

2 目的と方法

本報告は、相互に参照し合っていないにもかかわらず、似通った関心に貫かれて同じ主題へと向かった上記二つの研究の位置づけを確定し、それを通していまだなおわれわれの生活に大きな影響を与えつづける「近代的時間」の性質の解明を目指すものである。

そのために本稿はまず、近代的時間の成立過程を〈説明〉した二人の研究を比較することで、こうした近代的時間の〈説明〉の概要と、その現在でも存続する妥当性について明らかにする。ついで本報告は、真木の所説が、近代的時間の成立を〈説明〉するのみならず、近代的時間が不可避に伴う「時間のニヒリズム」への批判的契機を近代のなかに探究していくという、近代的時間についての〈批判〉の側面をも伴っている点に着目したうえで、真木が後者の根拠として到達した「生きられる共時性」という概念について検討する。その結果示唆されるのは、近代的時間を〈批判〉する唯一の根拠として真木が見出した「生きられる共時性」のほかにも、近代に内在しつつ近代的時間を〈批判〉する根拠となりうる別の時間が存在しうることである。

[文献]

- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press. =1993, 松尾・小幡訳『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』而立書房。
- 浜日出夫, 2010, 「記憶と場所：近代的時間・空間の変容」, 『社会学評論』, 60, 4, 465-479.
- Harvey, D., 1990, *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Cambridge MA & Oxford UK: Blackwell. =1999, 吉原訳『ポストモダニティの条件』青木書店。
- 真木悠介, 1981 [2003], 『時間の比較社会学』岩波書店。
- Urry, J., 2000, *Sociology Beyond Societies*, Taylor & Francis Books Ltd., London. =2006, 吉原訳『社会を越える社会学』法政大学出版局。